

「祖母の人生を変えた交通事故」

徳島文理中学校 一年 安岡 凜乃

「凜乃ちゃんはええなあ。今も優しいパパがいて。」

祖母が言った。祖母の父が交通事故で亡くなったことは知っていたが、今回初めてくわしい話を聞かせてくれた。それは全く予想もしない突然の出来事であった。

祖母の家族は大工の父と専業主婦の母、妹（小四）と弟（小一）のごくふつうの幸せな五人家族であった。昭和四五年二月二日、祖母が中学一年生の時に祖母の父は交通事故で二度と帰らぬ人となり、祖母達は交通遺児となった。しかもその事故は、無免許の未成年者が遊び心で友人に借りた車を運転したあげく、ひき逃げを試みた結果に起きた悲劇であった。その当時は今の様な交通事故後の補償制度も十分でなかった上に、相手が未成年者ということで、遺族への補償などは一切得られなかったそう。それからの祖母一家の生活はこれまでと比べ様がない程に激変し、壮絶なものであった。女性一人で三人の子供を抱えての苦労は想像を絶するもので、残された家族四人で毎日を生きていく為に必死で力を合わせ、一生懸命に精一杯の生活を送った。

「手や足がなくなっても、口がきけんかっても生きてさえいてくれたらよかったのに……」
死んでしまった人が二度とこの世に帰って来ないことを頭では分かっているけど、この事を祖母一家は心で願った。

「どんな姿でもいいから、私達の元に返して下さい。」

と何度も何度も泣き叫んだそう。しかし、残された家族は現実を受け止め、進んでいくしかなく、その道のりがいかに大変かは経験した者にしか分からない。祖母は、

「よく聞いて。こんなに辛く悲しい思いをする人もさせる人も絶対におつたらあかんのよ。事故がもたらす結末がいかに悲惨か、これだけは覚えておいてな。」

と言った。祖母の話聞いて私なりに考えてみた。

一人の青年の、これ位は大丈夫だろう、という気の緩みで祖母一家の運命は一瞬で辛く悲しいものへ変わってしまった。交通事故には人生を大きく変えてしまう力がある。私は今、強く思い、伝えたい事は、

「車を運転する人は事故を起こさないように責任を持って下さい。」

「もし交通事故を起こした時には、ケガをした人をすぐに助け、救急車を呼んで下さい。」

そこには、まだ救える命があるかもしれない。命をむだにしないで下さい。」

そして、何より強く願わずにいられないのは、

「祖母のような、祖母一家のような、辛く悲しい思いをしなければならぬ人をこれ以上増やさないで下さい。」

この思いが多くの人に伝わりますように。